

〈文献紹介〉

経済学者の追悼文集（Ⅱ）

杉原四郎

はしがき

本稿は前号にのせたものの続篇として、Ⅰで社会運動家4人の、Ⅱで明治の経済学者3人の、Ⅲで大正・昭和で活躍した4人の、そしてⅣで経済史家4人、計15人の追悼文集を紹介することにする。各節の中では生年の早い順序にならべた。資料蒐集に際し、戒田郁夫、藤井隆至、金沢幾子、脇村友雄、大浪美雪の諸氏にお世話になったことを深謝する。

I

（1）片山潜（1859-1933）

片山の生誕百年には雑誌の記念号がいくつか出た（例えば『労働運動史研究』第18号など）が、ここではつぎのものを紹介する。

『前衛』、日本共産党中央委員会、第161号、1959年11月、臨時増刊号、「片山潜、生誕百年を記念して」、192頁。

表紙に遺影、巻頭にグラビアの12頁で故人の生涯をしのぶ写真が掲載され、巻末に片山潜生誕百年記念会編の年譜と著作目録、片山潜系譜がのっている。

本文は、『片山潜の思い出』と遺稿三篇との二部よりなる。前者は、『百年祭によせて、各国兄弟党の諸同志から』とあるように、イギリス、チェコ、フランス、イタリア、中国、モンゴールの各共産党の幹部たち10人からのメッセージが収録、つづいて野坂参三、志賀義雄、松本惣一郎、平野義太郎の追悼文、最後にソ連科学院東洋研究所所員で日本に滞在中のペ・ペ・トペーバの「革命家の道」（生誕百年記念にソ連で発行される『片山潜選集の序文』）がある。

片山の文章はつぎの3篇である。

「書評・細井和喜蔵『女工哀史』——日本・改造社発行——」、『コンムニス

チャーチェスキー・インテルナツィオナル】、1927年、第15号（原文はロシア語）。

「自伝草稿」、ソ連のマルクス・レーニン研究所から送られてきた資料の一つで、片山が1920年2月アメリカでタイプ用紙209枚に書いた自伝草稿の写し（マイクロフィルム）で、岩波版『自伝』の草稿にあたるもの。ただし解説によると、岩波版の『自伝』との間にはかなりの違いがある由である。

「日本と迫りつつある社会革命」、1920年メキシコで書いたもの、『共産主義インタナショナル』1921年第18号（原文はフランス語）。

なお149頁に「片山潜著作集発刊について」があり、片山潜生誕百年記念発行、河出書房発売、全3巻の内容が紹介されている。前掲の「自伝草稿」もその第1巻に収録されるとのことである。

諸外国の共産党員からの追悼文の中では、モーリス・トレーズ「片山潜についての二、三の思い出」、康生「片山潜同志と中国革命」、パトチル「モンゴル人民の近い友人——片山潜——」の3篇が印象にのこる。

3人の日本人の文章の中では、志賀義雄のものが、片山をイギリスのトム・マンにくらべ、また彼を幸徳秋水や堺利彦に対比させつつ、片山の人間像をえがいている点が興味ぶかい。クレムリンの壁、片山の墓前でとった志賀義雄・蔵原惟人・武井武夫の寫眞が挿入されている。

(2) 安部磯雄 (1865-1949)

以前早稲田大学教務部発行の「安部磯雄—その著作と生涯—」(1964年)を紹介した(『思想家の書誌』日外アソシエーツ・1970年90頁)が、ここでは早稲田関係の雑誌を二種紹介する。

【早稲田学報】第7号、1959年3月20日。

「校報の欄に「安部磯雄先生——三代を通ずる偉大な足跡——」の表題で、名誉教授安部磯雄が2月10日江戸川アパートで病没したことを報ずるとともに、遺影をかかげてその略歴（とくに早稲田での活躍を中心に)をしるしている。

久保田明光は「安部磯雄先生を憶う」において、自分が「大正のはじめ予科学生として一番感銘をうけたのは浮田先生と安部先生であった」といい、学問上の影響では塩沢昌貞先生や浮田和民先生からの方が大きい、「人として」の影響力では安部先生のそれが最も強いとのべ、先生は「学者に非ず、政治家に非ず、神と偕に歩みながら人に接」しようとする方であったと書いている。

松田義男編「安部磯雄著作目録(1)、(2)。」『早稲田大学史紀要』17巻(1985年1月)、18巻(1986年3月)。

(1)は1887-1918年までの、(2)は1919-1949年までの安部の著作を、単行書と論説とに分けて刊行年月順にかかげている。安部の著作目録としては最も詳細なものであろう。なおこの目録は早稲田大学社会科学研究所の論文集『安部磯雄研究』に収録されている。

佐藤能丸編「早稲田大学史編集所蔵安部磯雄文庫目録」、『大学史紀要』第23巻、1991年3月。

この文庫は、1964年の安部生誕100年記念行事を契機として野球部の合宿所「安部寮」や安部の令嬢丸山夏代から寄贈された資料などから成り立つもので、この目録はⅠ自筆・著作とⅡ資料の二部からなっている。ⅠはA目録、B日記・日誌・自伝・家庭関係、C原稿、D講義ノート、E覚書・研究ノート、F演説原稿・演説梗概、G新聞掲載(含談話)切抜、H雑誌掲載切抜、I書簡、J墨跡の10項にわかれ、ⅡはA政党関係、B選挙関係、C早稲田大学野球部関係、D書簡、E新聞・雑誌切抜、F写真、G安部磯雄生誕百年記念行事関係、Hその他、の8項と参考として大学史編集所蔵安部磯雄著書30点のリストが掲げられている。

『早稲田大学史紀要』には安部について書かれた文章が多くのもっている。主なものは左のごとし。

木村毅「安部磯雄とトルストイ」、高野善一「明治40年のころ、高田学長と安部講師」第1巻第1号。1965年6月

杉本富士夫「安部磯雄青春書翰—駒尾夫人の文管をひらきて—」、第1巻第2号、1966年3月。

高野善一「安部磯雄の旗—日本社会主義の初心—」第3巻、1970年3月。

(3) 佐野学 (1892-1953)

『国民評論』、国民評論社、月刊、第214号、1953年6月、全文128頁、佐野学追悼特集。

巻頭に故人の遺影と遺稿「東洋的世界観と社会主義」の写真、略伝と主要著作目録がある。また巻頭言、小林五郎「佐野学君を偲ぶ」がある。

本文の冒頭に故人の遺稿「東洋的世界観と社会主義」が掲載され、巻末に佐野博「革命家佐野学」がおかれている。その間に約70名の寄稿があるが、社会運動家、学界人、早稲田大学関係の人々、親族縁者の四種に大別できよう。

故人は遺稿で、東洋人の世界観で社会主義の基礎とすべきものとして、つぎの三つをあげている。

(一) 自然と人間を同一生命に根源する同自的なものとして把握する生命論的、汎神論的世界観。

(二) 人間の生活の本質を道徳に求め、思弁よりも実践を重んずること。自己の肉體的弱さにうち克った人でなければ真の社会主義者ということはできない。

(三) 東洋社会の構造原理は、人間の自然の愛情を基礎とするところの協同社会である。自然愛を基礎とした民族主義を精神的動力とする東洋社会主義のもとにおいてこそ真の国際主義が発達するであろう。

佐野博(学の甥)は故人が1947年に創立した日本政治経済研究所の所長で、「革命家佐野学」で彼の生涯を(一)不滅の礎、(二)たゆみなき創意、(三)生い立ち、(四)青春時代、(五)共産党時代その一、(六)共産党時代その二、(七)入獄・内省・転向、(八)東洋思想の探究、(九)残した足跡、(十)永遠の童心、の10節でたどっており、この間に四葉の寫眞が挿入されている。

社会運動家の文章の中には、鍋山貞親「憂憤の思想家」、三輪寿社「惜しい人」、赤松克磨「佐野君の死を悲しむ」、風間丈吉「モスクウの佐野学氏」、三田村四郎「佐野学君と僕」などがある。学界人の文章では、大野信三「思想家兼学者としての佐野学氏」、八木秀次「佐野先生をしのぶ」、川野重任「人間のいとほしさ」、村田正志「佐野学氏の尊氏論」、中村菊男「革命家の死」などが注目される。早稲田大学関係では、同じ明治25年生れで大正9年共に母校の教壇に立った出井盛之「佐野学君の想い出」、北沢新次郎、上坂茜三、時子山常三郎、入交好脩(入交は故人が死の半月まえに入交に送った書簡の一節——東西貿易史の研究に意欲をもっていることをのべた——を紹介している)など、後者のものでは佐野新「学叔父」、松岡民子(長女)「追憶」、石田房子「父の面影」などが故人の面影をつたえている。

佐野学には戦前(希望閣、1930年)6巻の、戦後(著作集刊行会、1956-57年)5巻の著作集があり、経済史や社会経済思想史の労作がおさめられている。

(4) 三輪寿社(1894-1956)

『民主社会主義』、三輪寿社追悼記念号、1957年11月、第54・55号(第5巻第11号、10・11月号)、A5版181頁、民主社会主義連盟編(高木邦雄)、発行所社会思潮社。

本誌は冒頭の15葉の遺影からp.181の麻生良方の「編集あとがき」で全ページ三輪寿社に関する記事で埋められている。全三部より成り、第一部は「三輪

寿壯論文と病床日記（抄）」で最後に論文表と略年譜がついている。第二部は追悼論文と追悼座談会で、最後に6人の随想がついている。第三部は46人の追悼文である。

故人は1917年一高を卒業して東大法学部に入学、1919年新人会に参加し1920年に卒業するが、第一部には1920年6月新人会機関誌『先駆』第5号にのった「信濃路の春」をはじめ、1955年11月13日『読売新聞』に書いた「保守政党に望む」までの論稿が掲載されている。その中にはカウツキー『エルフルト綱領解説』の訳者序（『社会民主党綱領解説』、弘文堂、改版1925年）も含まれている。病床日記は1955年12月—56年11月の日記からの赤堀馨が抜粋したものである。（「あとがき」p.55参照）。第二部には、まずつぎの文章がある。河上丈太郎「三輪君を想う」、巖山政道「三輪さんと社会党」、笠信太郎「三輪さんの片影」、中村研一「中学修験館の寄宿舎」、嘉松隆一「二水会から新人会へ」、平貞蔵「社会思想社と三輪」、河野密「政治家としての三輪寿壯」、浅沼稻次郎「社会党と三輪寿壯」三輪正弘「家庭における父」。見られるように、大体故人の終歴に即した友人の文章がならべられ、最後に遺族（長男）の文章がある。座談会は、麻生良方が司会で阿部真之助、南幸一、小島利雄が鼎談した「三輪さんを偲ぶ」と、伊藤英治が司会した三宅正一、西尾末広、佐々木更三の鼎談「三輪寿壯を探る——政治家の裏おもて——」の二つである。これを補足するものとして、賀川豊彦、片山哲、波多野鼎、松前重義、海野晋吉、松井政吉の6名のエッセイがのっている。波多野は細野三千雄の日記を紹介しながら新人会の初期における故人の面影をのべている。第三部の追悼文の中では、新明正道、住谷悦治、大内兵衛、中村菊男、森戸辰男ら学界人や赤松常子、奥むめお、加藤シズエ、本島百合子らの寄稿もあって、故人の交流の広さをしめしている。

なお、『三輪寿壯の生涯』（三輪寿壯付記刊行会、1966年）があるが未見。

最後に大内兵衛の（法政大学総長）の文章「新しい政治家」を紹介しておく。

「私は三輪君と個人的に親しくしたことはない。しかし、やや遠いところから非常な尊敬を以て、親しい心持で同君の大成を楽しんでいた。私は高野岩三郎先生を学問の師として仰いだばかりでなく処生哲学の先生として何から何まで教えてもらった。その高野先生が、三輪君を特に信頼していた。多分森戸辰男君を連絡においてであったと思うが、河上、三輪、河野（密）の三人を、先生は一つのグループとして考え、実際政治の仲間と意識していた。そしてその

人々と自分との関係、とくに政治的な意見について、それからさらにその人々の身の振り方などについても、私に話をした。実にたくさん話をした。そのとき、先生のこの三君に対する友愛と尊敬とは、いつも私の心を打った。私もそのイメージによって、三君のイメージを作り上げ、それによって現実の三君をながめて来た。そういう意味で私は、三輪君は背の高い温厚なしかもなかなか守るところのある新しい政治家と考えていた。そして同級生の岸君が総理大臣になって一通りのことをやっているのであるから、三輪君ももう総理大臣になってもよいと思っていた。その方がどのくらい日本にとっていいことかと思っていた。そんな考えを人にいったり自分で楽しんだりしているうちに、三輪君は急に失くなった。……高野先生が生きていたら、さぞ残念がるだろうと私は何よりも先きに、そして何よりも強く感じた」。

私は本誌の第一部にのっている故人の「高野岩三郎論」(『解放』1922年5月号)をよんで、高野が三輪の人物を評価しているのと同様に、三輪も亦高野を高く評価していることを知り感銘をうけた。

II

(5) 金井延 (1865-1933)

河合栄治郎『金井延の生涯と学蹟』、日本評論社、1939年、全体がⅠ伝記、Ⅱ諸家の追憶、Ⅲ遺稿の三部に分かれる。ここではⅡ(pp.259-334)を紹介する。なおⅠの末尾に略年譜、Ⅲのはじめに年代別著作表がある。

Ⅱははじめに1934年7月1日に学士会館でひらかれた追悼会でのスピーチ(はじめに長男金井経彦と司会者児玉秀雄のあいさつ)——富井政章、田部芳、入沢達吉、原嘉道、志立鉄次郎、山崎覚次郎、高野岩三郎、広田弘毅(外務大臣)の8名——がのっている。田部芳はハイデルベルヒに留学中の思い出を、志立鉄次郎は大学生時代の思い出を、山崎と高野は経済学の指導をうけた思い出と金井の学問的業績について語っている。追悼文の筆者は、井上哲次郎、阪谷芳郎、志立鉄次郎、山崎覚次郎、原嘉道、窪田静太郎、塩沢昌貞、高野岩三郎、磯野長蔵、立作太郎、上田貞次郎、村田俊彦、児玉秀雄、神戸正雄、杉田富、明石昭男、尾上登太郎、大内兵衛の18名で大体年齢順にならんでいる。

井上哲次郎は、学生時代に映翼会という会で2、30人位があつまり演説をしていたことを書き、その中で英語の演説をした金井が和田垣謙三の目にとまり、彼の影響で金井も経済学の専攻に進んだとのべている。山崎は金井が保持

する学説に忠実だったことは金本位制採用の前後における態度がえを明示するとしてつぎのよりのべている。「明治26年から同28年に亙る貨幣制度調査会に於て、先生は金銀両本位制を強く主張された。従って政府が愈よ金本位制を採用せんとするや、先生は極力これに反対し、演説等に於て之を発表した。当時先生は大蔵省参事官を兼任されて居ったが、当局とその意見を異にしたために、潔く之を辞任されたのである。明治27年に帝大では法科に入学した。村田俊彦によれば、当時経済学の科目としては、経済学（金井）、経済史（和田垣）、貨幣論銀行論（田尻）、統計学（ウェンクステルン）、財政学（金井）の五科目で、経済学は二講座制（第一講座は金井、第二講座はホックスウエルの担当）であった。金井の講義は原論、学史、社会政策、工業政策、商業政策、農業政策等を含めたもので、時間も他の科目より多かった。明治42年に入学した大内兵衛は、金井の講義ぶりやその代表作『社会経済学』をとりあげて、金井のわが国の経済学史にはたした役割、ドイツの社会政策学会のわが国への導入のパイオニアという役割について詳述している。

また、早稲田大学の塩沢昌貞は社会政策学会、経済学研究会での金井との交際について、東京商大の上田貞次郎は、東京高商～東京商大と金井とのかかわりについてのべている。

(6) 桑田熊蔵 (1868-1932)

『法学博士桑田熊蔵遺稿集』、編集兼発行者桑田一夫、1934年発行、860頁、非売品。巻頭に故人の肖像、窪田静太郎の序、高宮誠の凡例、略歴、徳川家達と岡田良平の弔辞があり、つぎに5人の追悼文がある。凡例によればこれらは逝去の当時雑誌にのったものを編者が紙面の都合で短縮したものである。以下は故人の遺稿が社会政策からはじまって、欧文論文集に及ぶ全部で九部にわけて収録されている。最後に桑田一夫・英次・三樹男の三名連記による後記があり、関係者への謝辞がのべられている。ここでは5人の追悼文を紹介しておくことにしよう。

矢作栄蔵「兄事せし桑田博士の風容」、『斯民』1928年2月号。

矢作によれば、桑田はみずから長となることを避け、理事等幹事の一人として主脳者を助けるという態度をとった。社会政策学会でも会長のない学会の幹事をつとめ、自宅を学会の事務所にあて、毎月研究会を開いた。やがて学会の中で左右両派の対立が生じ、右翼の勇将と目されていた桑田は幹事を辞し、学会は意見の統一をみることが一層困難となり休眠状態になってしまった。又桑田は中央報徳会を創立してその幹部となった。彼は二宮尊徳の報徳主義を生活

の信条としていた。更に労資協調の運動のため協調会をつくってその常務理事となった。其他帝国農会の副会長や産業組合中央会の理事など多くの役職をつとめ、社会政策の実現に努力した。

窪田静太郎「交友四十年の追憶」『社会事業』1933年2月。

窪田は工場法制定に際していかに桑田の功績が大きかったかをのべる。窪田は内務省の参事官兼農商務省書記官として農商務省商工局長の木内重四郎とともに工場調査に当ることになったが、その場合桑田の協力を希望し彼も喜んで参加してくれることになった。浩瀚な調査報告は桑田の執筆した所が少なくない。

松井茂「親友桑田博士を弔す」、阪本鈴之助「故桑田博士を憶ふ」、中川望「親友桑田博士を憶ひて」の3篇も『社会事業』の1933年2月号にのった。松井は桑田が社会局参与として我国社会事業の枢機に参加し、或は我国で始めての貧民研究会に参加しその研究会の後身たる財団法人中央社会事業協会の為に活躍したことを、また阪本と中川は桑田がいかに日本赤十字社の為に尽力したかについて詳述している。

(7) 山崎覚次郎 (1868-1945)

『経済学論集』第15巻第5号、山崎覚次郎博士追憶記念号、1946年5月。

山崎は金井延の追悼文でも書いているように金井の特別の推薦によって東大のスタッフに残ることになった(前掲書294頁参照)。戦争末期の1945年6月28日に病没したので、記念号の刊行が約一年おくれたわけである。

論文に金融論で山崎のチェアをついた、荒木光太郎の「故山崎覚次郎博士とその学説」、金融学会会長高垣寅次郎の「世界幣制の進む跡」の二本いずれも山崎の学問にゆかりの深いもので、追悼文は明石照男と安井琢磨の二人、最後に年譜と著作目録がある。年譜によると、故人は明治24-28年私費でハレ・ベルリン・ライプツィヒの大学に留学し、帰国後東京高商教授に就任、東大助教教授になったのは明治35年だった。著作目録によると、11点の著書のうち大半が貨幣論であるが、シュルツェ・ゲーファニッツ『大工業論』の翻訳(有斐閣、1928年再版)と『経済原論』(有斐閣、1917年、1938年改訂8版)があることが注目されよう。

明石照男は、自分が山崎の初弟子の一人で、山崎が助教の頃明治38年夏にグリッフィンの死後担当した経済学史の講義を聴いたと書いている。また明石がドイツ留学中に時偶々経済学部創立にあたっており、当時ミュンヘン大学に来ていた高野岩三郎から教授になることをすすめられたが、「そのことに到る

までの学部内の事情は山崎先生の推挽に負ふところが多かったやうに聞いているが……先生の温情溢るる御高嘱に背いた」とものべている。

安井は、東大経済学部の内紛の際に山崎が経済学部再建に関する事務を囑託された（1939～40年）とき、山崎の宅のごく近くに住んでいたという事情もあって、専攻のちがうのに「大先輩の晩年の聲咳に接することができた」とのべている。そして安井は「先生は短文一つ書くのにも極めて慎重で手堅く、……啓蒙としてではなくむしろ Fachmensch として終始された」とし、「福田博士のあの龐大な全集と山崎先生の数冊の著書とのいずれが学問的価値において永続性を有するかは遽かに決定しがたい問題であろう」と書いている。

Ⅲ

(8) 森本厚吉 (1873-1950)

森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』、A 5 版786頁、1956年巻頭に遺影2葉。

刊行会委員長の根岸勉治が「あとがき」に書いているように、本書はⅠ伝記、Ⅱ消費経済学研究、Ⅲ文化生活運動、Ⅳ女子教育と学校経営、Ⅴ追憶からなり、末尾に年譜（著作目録をふくむ）を附している。ここではⅤにおさめられた28編の追憶文の筆者とタイトルのみを紹介する。

(1)「森本先生の想出」橋本寛敏。(2)「森本厚吉博士の思想と事業」帆足理一郎。(3)「森本先生は温い人格の学者だった」鈴木義男。(4)「森本博士と文化アパートメント」下村海南。(5)「我が師森本厚吉先生を讃う」中島九郎。(6)「森本厚吉先生の経済学説」松田武雄。(7)「森本厚吉先生に師事して」根岸勉治。(8)「歴史家としての森本先生」小平国雄。(9)「厳しかった兄」尾崎寿賀。(10)「森本家のみちびきによって私はキリスト教徒になった」ハンス・ユラー夫人。(11)「森本博士は私の永遠の友である」エドナ・シェック。(12)「民主的な先生の一面と忘れ得ぬ御懇情」沼畑金四郎。(13)「森本厚吉先生をしのびまつる」小田喜貞三。(14)「私生活における厚吉先生のことども」宮田磯治。(15)「おえらかった厚吉先生」豊納未津。(16)「先生の厚い御垂訓を守って生涯を終わりたい」本田力子。(17)「森本先生のおもい出」高野すみ江。(18)「あの頃の森本先生と経専学園」岡田千代野。(19)「先生の親友として緒方竹虎氏が乾杯して下さった」中田正子。(20)「お茶の水時代の森本厚吉先生」倉田錦江。(21)「わが永遠の師を憶う」尾沢タマ子。(22)「思い出すまま」小山田千枝子。(23)「忘れがたいことども」林しづ子。(24)「生活文化

の先駆者でありロマンチストでもあられた先生」米原禎子。(25)「ああ先生の歌声」湊くに。(26)「カーライルと微笑」大沢雅子。(27)「父に受けた教育の記録」森本武也。(28)「発病と病床中のおもいで」森本静子。

森本厚吉が主宰した文化普及会が発行した雑誌『文化生活』（1923年5月－1930年3月、1928年に通巻第100号を機に『経済生活』と改名）が全巻不二出版から復刻刊行されることになった。その内容見本に小川信子、佐藤全弘、ヘンリー・スミス、西川祐子がすいせんの言葉を書いている。また『本郷だより』（不二出版、第25号、1997年4月）に池上重康「文化生活と北海道帝大」と松岡昭子「文化生活と森本静子」がのっており、『文化生活』解説・総目次・索引（不二出版、1995年）には高原二郎「森本、有島、吉野と『文化生活』」、西川祐子「雑誌『文化生活』と男性本位の家庭イデオロギー」という二つの解説がある。

森本厚吉については、従来有島武郎の親友として知られているのみで、彼自身の研究者・教育者としての活動は余り知られてなかったが、『森本厚吉』や『文化生活』の復刊によって今後より知られるようになってゆくことが期待される。

(9) 三浦新七（1877-1947）『三浦博士生誕120年、没後50年記念小冊子』、三浦新七博士胸像建立の会、1997年8月、40ページ、非売品。巻頭に清水多嘉年作「三浦新七博士像」の寫眞、建立の会の序があり、巻末に附録の略年譜がついている。4人の文章はいずれもかつて一橋大学関係の資料に発表されたものからの収録である。

上田貞次郎「三浦博士を語る」、三浦前学長銅像除幕式の式辞で上田（当時学長）は三浦の学者として、先生の先生として功績があるのみならず、高商から商大への昇格の時や、最近の学園騒動の時の学長としての活動のように、学校行政の上でも抜群の活動をしたことをたたえている（『一橋新聞』、1938年2月14日）。村松恒一郎「三浦先生の学問」は、三浦があればほどの蘊蓄を持ちながらなぜそれを外に向って発表しなかったかを問い、「先生の場合には研究全体は最後まで完成せられなかった、少くとも完成したと思はれなかったのではなかろうか」とのべている。そして三浦がランプレヒトの許で獲た主観的歴史観と比較文化史的方法を最後まで守りつつ、ランプレヒトのドイツ国民史の研究を多数の国民文化を含む西洋文化全体に適用しようとし、まず古代諸国（ギリシャ・ローマ・ユデア）の諸国民性の研究に着手、後に近代文化に焦点をうつしたが、更に今次の戦争を機に、日本・東洋・西洋の比較文化の研究に立ち

向ったとのべている（「故村松恒一郎教授手稿より」）。増田四郎「三浦先生の世界史観」は、三浦の学問的関心がヨーロッパ文明から漸次アジアに移ってゆき、インド、中国へとだんだん日本に近づいて来たとのべ、三浦の『西洋文明史論考』の内容を紹介しつつ、最後につぎのように結んでいる。「初め、両毛の機織物の研究から出発されて、ヨーロッパの学問というものを見て、そして帰って来て、象形文字から中国の歴史や芸術まで、それから何よりも日本、『一橋論叢』に出された『西洋文化とは日本精神』という大論文。あれが先生の印刷されたものとして最後のものであります」（『一橋の学風とその系譜2』、1985年）。増淵龍夫「三浦文庫について」（『一橋大学附属図書館史』、1975年）は、三浦文庫が「三浦新七先生記念事業会」の後援で一橋大学に寄贈されたことや改訂された『三浦文庫目録』のことを紹介している。なお、『一橋論叢』第22巻第1号（1949年7月）の記念号には村松恒一郎「三浦新七先生とカール・ランプレヒト」、田崎仁義「その頃の三浦新七博士と私」、増淵龍夫「三浦新七先生年譜略」がのっている。

【やまがた】第3号、1997年10月、山形市総務部広報課、特集【やまがたの偉人三浦新七博士——その生涯と業績——】。

2～7ページに、山形生れの三浦が山形中学で結城豊太郎と同期で終生の親友だったこと、三浦が東京高商に進んで卒業と同時に講師になり、9年間のドイツ留学を了えて母校での講義と研究に打込んだが、1927年の金融恐慌に際し山形経済界を守るために両羽銀行頭取として7年間献身する一方、山形経済文化の指導者として活躍すること、最後に母校の騒動に際し頭取をやめて学業に復帰、学長として手腕を発揮したとのべている。阿部謹也学長談や遺影その他約20葉の寫眞と年譜がある。なお三浦新七博士胸像建立の会が出した記念パンフレット（1997、8、12）には、胸像の寫眞と銘文および山形大学教授国方敬司の『三浦新七博士に学ぶもの——博士の学問とその今日的意味』などがのっている。

(10) 脇村義太郎（1900-1997）

【経友】（東京大学経友会）、第139号、脇村義太郎先生追悼、1997年10月。故人の遺影一葉。

10篇のうち、大内力と中条伸之のものは、1997年5月19日、神田学士会館で開かれた追悼会の席上におけるスピーチに加筆したものである。大内は、故人が父大内兵衛のゼミ生であった頃から知っていたが、学生時代は故人が休職中で受講の機会が得られず、学士院会員として接触する機会があったといい、故

人の特長として、故人はそれぞれの事柄に関係した人物についてとくに強い関心を示したこと、抜群の記憶力の持主であったことをあげている。そして最後に彼が関心を持ったのは「戦争と学者」というテーマであって、有沢広己や中山伊知郎らが戦中戦後にどういう役割を戦争に関連してはたしたかについて、学士院の研究会で二回発表したことをのべ、その速記を近く公表したいといっている。中原は脇村ゼミの一人として34年間つづいたこのゼミがなぜ人気があったかについて、故人の就職の面倒見のよさ、ゼミでとりあげるテーマの幅広さ、家族的な雰囲気のあるゼミOB会のたのしさなどをあげ、故人の満92才の記念に『わが師・わが友』⁽¹⁾ (430ページ) を作って贈呈したとのべている。他に瀧沢三郎、三谷誠一、白井孝之、土屋守章、関岡正弘、稲見美部樹、光田明正、三宅純一らも追悼記を寄せているが、瀧沢は若手経営学研究者による国際共同研究（「伊豆コンファレンス」）のことで、白井孝之は地元の青少年のために作られた「脇村奨学会」のことで、東大で脇村のチェアを継いだ土屋守章は「リベラルな合理主義者」としての故人の面影を語っている。なお『経営史学』第32巻第1号（1997年6月）に山崎広昭は「追悼脇村義太郎先生」を書き、『毎日新聞』1997年6月22日の「今週の本棚」に伊東光晴は脇村義太郎の本として『東西書肆街考』、『趣味の価値』の岩波新書、『回想九十年』（岩波書店）の3冊をあげている。

脇村は三高入学時に河上肇に接して以来、河上を尊敬し、彼についての研究をつづけており、京都の河上肇記念会にはよく出席していた。その『会報』第57号は脇村の追悼号で、金田重喜と杉原四郎が追悼文を書いている。私は故人と河上との関係について略述した後、最後に岩波書店の『河上肇全集』の刊行に彼がかかわったいきさつについて触れた。この事について彼は東京の河上会で1996年に報告したが、それが河上について公けの席で話した最後になった。

(11) 東畑精一 (1911-1983)

東畑については、『東畑精一先生の足跡』（1984年）と『金融経済』（第205号、1984年）の追悼号とはすでに紹介したが、ここでは東大農学部関係者を中心として農業経済学者東畑精一について述べられた文集を紹介する。

神谷慶治編『想い出の東畑精一先生』、A5版162頁、1986年5月。農村更生協会発行、非売品。

神谷は「はしがき」で、故人の没後3年の頃農経の親しい仲間があつまって「先生の恩を偲ぶ思い出を書いて」出そう、それに不足の部分は座談会で補おうということになったとのべ、東畑の蔵書の行方（農業総合研究所、東京農業

大学、三重県農業技術センターの資料館)について書いている。

本書はつぎの三部から成る。Ⅰ、神谷慶治「『日本農業の展開過程』の前後」、大川一司「『朝鮮米穀経済論』にはじまって、加用信文「東畑先生の卒業論文について」、錦谷赴夫「共同研究『日本農業の全貌』を回顧して」、Ⅱ、篠原泰三「農経教室での東畑先生」、小倉武一「東畑精一先生とある役人」、三沢嶽郎「東畑精一先生の学恩」、Ⅲ、古島敏雄「東畑先生と『歴史』に関する思い出」、川野重任「回想の中の東畑先生——ドラマの中の『観照』」、並木正吉「農業人口に関して教わったこと」、渡辺兵力「先生の自然観」、逸見謙三「シュムペーター『経済分析の歴史』の訳出」。巻末に1986年1月東京で開かれた座談会(神谷、篠原、川野、逸見の他浦城晋一、西村甲一、森嶋賢、斎藤誠、井上勝英ら計9人)の記録が付されている。その中から東畑の卒業論文のこととシュムペーター『経済分析の歴史』の訳出のことを紹介しよう。

加用信文によれば、東畑が1922年に書いたこの卒業論文「リカド派土地社会主義論〔未定稿〕」(レポート用紙140枚、400字で約350枚)は、いま農業総合研究所にある。「マックス・ペーアの『イギリス社会主義史』(1920)を主要な標本として」書いたと東畑がのべているこの論文を、加用は「先生の学業績としても恐らく最高位に属する」と評価しているが、つぎのようなその編別構成をみても、「いかに壮大な構想のもとでの体系的な考察」であるかがうかがえるであろう。Ⅰ、リカド派土地社会主義の概念、Ⅱ、その発生の原因、Ⅲ、その理論的根拠、Ⅳ、リカド地代論の社会主義的应用、Ⅴ、ジェームス・ミルの説、Ⅵ、ジョン・スチュアート・ミルの説、Ⅶ、ヘンリー・ジョージの説、Ⅷ、リカド地代論の拡張改造及び土地社会主義の発展、Ⅸ、その实际的運動、Ⅹ、リカド派土地社会主義の批評及び種々の疑問。

東畑が「索引などを含めると2700頁を超える訳文を全く一人で」行ったのは「実におどろくべきことである」とこの訳業を手伝った(先生の訳文を原著と照合し、正鶴を期すという)逸見謙三はのべ、「意識を排して原著の風格を伝えようと努力される、他方で引用文献に関して徹底して読者の便宜のために苦勞されるという先生の態度に私は感動した」と語っている。

東畑が最も苦勞したのは原著第四編第七章以下(訳書第6・7巻)のところで、彼はこの部分については東大経済学部の古谷弘に相談するつもりだったが、古谷の突然の死で相談相手を失い、「私(逸見)が生半可な知識で先生の質問に答えざるをえなくなった」。なお座談会でシュムペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』の原稿がいま三重県の農業技術センターにあることが

出てくる(151-152頁)。古谷弘がハーバートから持ち帰って東畑に渡したものだという。

Ⅳ

(12) 土屋喬雄(1896-1988)

『経友』(東大経済学部同窓会), 113号, 土屋喬雄先生追悼, 1989年2月
寫眞故人の遺影一葉。

脇村義太郎(日本学士院), 小山五郎(葬儀委員長土屋ゼミ生代表), 中村貢(東大経済学部長), 鈴木淑夫(日本銀行理事)が1988年8月28日の葬儀に際してのべた弔辞4篇をのせ, 他に門下生山口和男, 加藤俊彦, 杉山和雄, 藤沢清作の追悼文4篇を取録している。

脇村は, 故人が学士院会員として6回研究報告をし, とくに「維新変革の性格についての論争とその中止から二十余年後の判定を下したような状況について」は, 「博士の昭和八年以来参加された『日本資本主義論争』の判決的結論というべきもので」と述べている。小山は, 昭和五年にゼミ第一期生として入門したこと, 故人が「私も三井グループについても, 三井銀行はじめグループの戦後復興について歴史家として優れた見直しと的確な助言をいただいた」とのべる。また中村貢は, 日本資本主義論争の当時, 故人が「論敵に対しても, 論争の土台たるべき資料はこだわりなく提供するという, 土屋先生のフェアな態度」をのべるとともに, 故人が「華やかな論争主体から地味な資料編集者に転身され」て, 『明治前期財政経済史資料集成』, 『渋沢栄一伝記資料』, 『日本金融史資料』などの編集にあたったと書いている。この最後の『日本金融史資料』については鈴木淑夫が82巻が刊行ずみのこの資料を今後も故人の遺志をついで続けてゆくこと, またこれも故人の指導で日本銀行が「貨幣博物館」を設立したことをのべている。

山口和雄は, 故人が『渋沢栄一伝記資料』に関係した経緯, 山口が太田慶一に代ってそれに参加したこと, 戦後刊行会の手で再開, 68巻の大文献となって完結したことをのべるとともに, 土屋が研究の重点を戦後経済史から経営史に移したことを書いている。加藤俊彦は「昭和10年代の土屋先生」で『日本金融史資料』の事業を自分が手伝うことになった事情を中心にのべる。杉山和雄は『石川島重工業株式会社108年史』や『地方銀行小史』の編集に参加して土屋の指導をうけた思い出をのべ, 藤沢清作は大学院で2年間資料をあつかうイロハ

を教えられ、それを教訓に会社で一貫して調査・企画業務に従事したことをのべている。

(13) 関矢留作 (1905-1936)

関矢は新潟高校から東大農学部に進学、卒業後産業労働調査所→プロレタリア科学研究所→農民斗争社に所属して、『プロレタリア科学』に、農業問題の論考を発表したが、31才で早世した彼のことを、長岡新吉は『日本資本主義論争の群像』（ミネルヴァ書房、1984年）の中でかなり詳しく論じている。(233-241頁) それによれば1930年12月に検挙され、2年半の獄中生活を送った後、政治運動との絶縁を表明して出所、生地北海道の野幌に根を下ろし、野幌部落史論集の仕事に没頭するが、1936年5月に急逝する。長岡が関矢に注目するのは、彼の農業問題の論考の中で、プロ科の理論家として出発しながら講座派の農業論に批判的で、むしろ猪俣のそれに近く、猪俣と同様に柳田国男の仕事に関心を持っていたからで、彼のプランに沿って妻マリ子が論争完成した『野幌部落史』（北日本社、1947年、1974年より国書刊行会より再刊）も講座派主流への批判を内包した理論の構築を志していた晩年の関矢の「問題関心のいま一つの結晶であった」とのべ、守屋典郎『日本マルクス主義理論の形成と発展』（青木書店、1967年）における関矢評価を批判している。

『野幌部落史』の初版に高倉新一郎はつぎのように書いている。野幌部落は、北越殖民社の遠大な計画と援助の下に北海道庁開設期に開かれた村で、北海道の部落の発達を見るためには最もいい材料の村の一つだが、殖民社創立当時より此の事業に参画し、後その指導と運営に尽瘁した関矢孫左衛門の一子関矢留作が、農村問題の探究を実証に求めて帰郷した。恰も昭和14年に開村50周年を迎える記念事業として部落史の編集計画がすすみ、その任が関矢に委ねられた。高倉は関矢の訪問をうけ、この仕事の完成を願ったが、彼の死で中絶したことを残念に思った。しかしその事業がまり子夫人の手ですすめられていることを知り、知人よりその助力を依頼されてこれを引きうけた。

また高倉は本書の再版の序につきのように記している。

「この部落史が成功したのは、編集者が部落に生活する内部の人であったこと、部落の成り立ちが計画的に進行され、指導されたばかりでなく、たとえば編者の父……関矢孫左衛門の日記（明治19——大正五年）が存在していたことなどによるが、また関矢君の深く高い問題意識があったからに外ならない」。

また本書再版の「あとがき」で関矢マリ子という。関矢の旅先で急死に会い、これまで彼の行動に批判的であった自分にも彼の帰郷が「以前からの仕事

の中止ではなく側面からの模索だった」ことがわかりはじめ、本書の編集に「よそ者の私も一員として書き手になり、その仕事の中で部落に対する愛情も、編むことを手伝う自信も生れてきたし、他方で苦勞や挫折感も生れたが、「北大の高倉教授はたえず励まして下さっ」た……。

関矢マリ子には『のっぽろ日記——冬のたわごと——』というエッセー集があり（北海道女性史刊行会、1977年）、その中に桑原真人編「関矢マリ子著作目録」がある。その最初に掲げられている「関矢著作について」（1936年）は「60ページ足らずの小冊子」で、「マリ子が自費出版し、夫の急逝から3ヶ月後に友人知己に配った」もので、「これに初めて活字になった関矢の遺稿やノート類そして書簡の下書」もふくまれている「筆者の知性と亡き夫への深い情愛がにじみ出ている思い出の記」（高倉、前掲書、238頁）のようだが、未見である。

(14) 増田四郎 (1908-1997)

『創文』創文社、第391号。追悼増田四郎先生、1997年9月。遺影八葉。略歴と主要著書リスト。巻末の「創文通信」に「今月は去る6月22日に逝去された増田四郎先生を偲んで追悼号としました。告別式は、6月27日に東京の護国寺で執り行われました」とある。

小松芳喬談「増田四郎君の思い出」。

小松は1939年に留学から帰って比較経済史研究会に入り、そこで毎月故人と顔を合わせるようになったとのべ、「四郎君については、学問はしっかりしているが、器用に立ちまわられる方ではないのが一抹の不安だといった人物評をそれまでに聞いたことがあったような気がしますけれども、四郎君の誠実さは、いつの間にか、高村（象平）君の憂慮を雲散霧消させてしまったと言ってよかった」とのべて、最後に故人が経済史研究の入門時代に幸田成友教授よりうけた史学研究法の貴重な訓練をはじめとして、「どこの国のいつの時代の歴史を調べても、世界全般との関連が常に頭脳を占拠していた増田史学の特徴」についてふれている。

阿部謹也は、「先生は常に『自分は素人として学問をしている』と言われていた」が、これは「先生の学問の質を知る上で大切な言葉である」、「学問の世界から普通の人の視点が消え、専門家が幅を利かす時代になりつつあるように思われるこのごろ、先生が去られたことは唯一の支えがなくなったような寂しさを感じず」と書いている。

石川武は、故人が豊かな学殖にもかかわらず生涯かわることのない「謙譲さ

に裏打されていたればこそ、多くの若い学徒が出身大学の枠をこえて先生を慕った」とのべる。山田欣吾は、「先生の学問形式に影響を与えた三人の教授」三浦新七、幸田成友、上原専録のことについて書き、佐々木克巳は、「私の場合、忘れ難い増田先生の思い出の、少なくないものに、(アンリ・ピレンヌ)の名前がまつわってくる」ことを語り、栗原福也は、故人が一切の公職から退いた後は「若い頃から好きだった油絵を描かれることになりよりも悦びを見出された」とのべ、故人は「折りにふれて歴史学は過去の多様な事象を絵に描くことだと述べられ」ていたとも書いている⁽²⁾。

(15) 松田智雄 (1911-1995)

【経友】(東京大学経友会) 第135号、松田智雄先生追悼、1996年6月。故人の遺影一葉。

隅谷三喜男は、1995年11月4日の葬儀での弔辞で、故人との交わりはキリスト教社会科学研究会を通じて、また1955年東大経済学部教授になって教授会で隣の席に座るようになってから更に深まり、それを通じてドイツ経済史について多くを学んだことをのべ、故人が東大退官後日独文化交流や日中人文社会科学交流につくしたことについてかいている。諸田實は、青年時代に故人の處女作『近代の史的構造論』(1948年)を愛読したこと、東大の経済学部で松田ゼミが誕生した1952年(1956年に再開)の頃のこと、その松田ゼミの小冊子Botshaftのことをしるしている。また故人が40才代の終りにはじめてドイツのチュービンゲンに留学し、そこで何を研究したかについて、最後に「ドイツ資本主義研究会」(ADWG)を組織して多くの俊秀を学界に送り出したことをのべている。また渡辺尚は、そのADWGに院生になりたてで「おそろおそろ参加した」のだが、当時はまだ「単純素朴な生産力主義に凝り固まって」いた渡辺は、故人の説く「流通の優位」、「高賃銀経済」などになかなかじめなかったが、1966年にDAAD奨学生としてケルン大学に留学、3年をそこで送る中で故人がチュービンゲン大学で身につけた新しい問題意識を自分のものにし、「先生の同志として戻ってきた」とかいている。最後に渡辺は、故人が待っていた日独経済学・社会科学シンポジウム第11回会議が予定通り3月26-28日に行われ、盛会裡に閉幕したこと、「このシンポジウムが新しい30年にむかって力強く一步を踏み出したこと先生に報告申し上げますことを本当に嬉しく存じます」と語っている。

なおこの渡辺の文章の中に出てくる『交流簡報』(松田智雄会長追悼号、1995年12月)は未見である。

- (1) 『わが師・わが友——協村演習に学んで——』（西村鍊次郎編，協村演習OB会発行，非売品）には89名の寄稿と多くの写真がおさめられ，1927-1935年のゼミのあゆみをうかがうことができる。
- (2) 『如水会会報』（第810号，1997年10月）には，幸島礼吉，行木陽一，阿部謹也の三氏の追悼文が掲載されている。